

研究の概要

1 研究主題

粘り強く解決し、学びを深める児童の育成

～算数科授業づくりの工夫を通して～

2 主題設定の理由

本校では、昨年度、「主体的・対話的な学習を通して学びを深める児童の育成」を目指し、国語科・算数科の授業において、課題づくりの工夫、対話活動「なるほどタイム」の工夫を中心に研究を進めてきた。主体的な学びにつなげる課題づくり、深い学びにつなげる対話活動「なるほどタイム」を意識しながら授業づくりを行った。特に国語科では、これまで培ってきた研究の成果を生かし、単元を通じた学習課題・言語活動の設定を行い、「問い」を解決していくことによって主体的・対話的な学びを引き出し、身に付ける力に視点を置いた指導の充実を図ることができた。そして、国語科での指導の成果を算数科にも広げ、教科の特性の違いはあるが、設定した課題を解決していく過程の中で主体的・対話的な学びにつなげる授業の在り方を探ることもできた。

しかし、昨年度の標準学力検査（CRT）や佐賀県学習状況調査（12月調査）の結果から見てみると、観点別正答率において、算数科での「知識・理解」「考え方」がおおむね達成を下回る学年が少なくなかった。ただ、昨年度の算数アンケート（7月、12月）の結果では、課題づくりの工夫や対話活動の充実から学習意欲が高まり、「算数が好き」と答えた児童が増えており、「めあてを意識して課題を解く」「既習事項を使って自分の力で解く」と答えた児童も増えていた。つまり、学習への意欲の高まりや解決するよさを味わっているといった成果は見られるが、基礎・基本的な知識の習得が十分でなく、習得した力を活用して課題を解決する力につながっていないことがうかがえる。また、本校の児童の実態として、学力の個人差が大きいことや最後まで粘り強く取り組むことができず、自己肯定感が低い傾向にある児童も見られる。

今年度から完全実施となる新学習指導要領では、これからの予測困難な時代を生き抜くために不可欠な資質・能力として、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱が示されている。そして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、生きる力を育むことが重視されている。新しい時代を生き抜いていくためには、様々な問題に直面したときに、自らの問いを持ち、新たな知識や技能を学び取り、習得した力を活用して思考・判断・表現を繰り返しながらよりよい解決を図っていく力が必要となる。そして、その過程では、あきらめずに何度も粘り強く問題を解決し続けようとする力を身に付けておくことが重要となってくる。「主体的な学び」とは、単なる意欲的な学びではなく、「見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」学びであり、「対話的な学び」とは、単に活発に話し合いをする学びではなく、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」学びである。さらに、「深い学び」とは、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びである。こうした学びを実現し、生きる力としての資質・能力を身に付けさせるためには、やはり、「粘り強さ」が必要となってくる。

このような現状を踏まえ、本研究では、算数科の授業づくりにおいて工夫・改善をさらに進め、児童が数学的な見方・考え方を働かせながら、基礎・基本的な知識・技能を確実に習得し、他者と関わりながら粘り強く課題を解決していく力を向上させることが必要であると考えた。そのためには、主体的な学びを引き出す課題設定の工夫、必然的な対話を生み出す場の設定、次の学習につなげる振り返りを結びつけて、児童にできた喜びや学ぶ楽しさを感じ取らせる授業づくりに取り組んでいくことが大切であると考えた。

そこで、今年度は、算数科の授業づくりの工夫を通して、自分の課題を「粘り強く解決し、学びを深める児童の育成」を目指したいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究目標

算数科の授業づくりにおいて、児童が数学的な見方・考え方を働かせながら、基礎・基本的な知識・技能を確実に習得し、他者と関わりながら粘り強く課題を解決していく力を向上させる指導の在り方を探る。

4 研究仮説

算数科において、主体的な学びを引き出す課題設定の工夫、必然的な対話を生み出す場の設定、次の学習につなげる振り返りを結びつけた授業づくりに取り組み、児童にできた喜び、学ぶ楽しさを感じ取らせていけば、粘り強く課題を解決していく児童を育成していくことができるであろう。

5 研究の内容

(1) 目指す児童の姿の設定

授業研究部 (低・中・高学年部)

(2) 算数科における授業づくり

授業研究部 (低・中・高学年部)

①主体的な学びを引き出す課題設定の工夫

- ア 児童の身近にあるものを題材とした課題
- イ 前時と同じように考えられそうだが実際には少しだけ違う課題
- ウ 振り返りで「疑問に思ったこと」「やってみたいこと」が反映された課題
- エ 児童が持っている概念とのずれが生じる課題
- オ 相手意識や目的意識をもった課題
- カ 単元全体を通したゴールを明確にし、解決していく課題

②必然的な対話を生み出す場の設定の工夫

- ア 互いの考えについて相違点を明確にするための思考の可視化
(具体物、図、式、表、グラフを用いて考える、説明する)
- イ 思考スキルの活用
(比較する、分類する、関連付ける、理由付ける、多面的に見る、順序立てるなど)
- ウ 児童の発言に対する立ち止まり、問い返し

③次の学習につなげる振り返りの充実

- ア 視点を明確にした振り返り
(授業で学んだこと・身に付いたこと、友達の考えから、次の学習につなげたいこと)
- イ 振り返りを価値付ける場の設定
(本時の終末、次時の導入)

(3) 学習の基盤づくり

専門部 (学習基盤部)

- ①学習の約束について (学習用具、学習規律、ノートの使い方)
- ②家庭学習のやり方について (時間、内容、約束、強化週間の設定)
- ③朝の時間の工夫 (読書、音読、さんさんタイム)
- ④基礎・基本の定着 (漢字・計算フェスタの実施)
- ⑤スキルアップ研修 (発問・指示の仕方、ノート指導、板書など)

(4) 校内環境づくり

専門部 (校内環境部)

- ①校内環境の充実 (各掲示板、玄関、算数コーナーなど)

6 研究の方法

- (1) 資料及び文献による理論研究
- (2) 授業研究による実践的研究と検証
- (3) 講師招聘による指導助言、講話
- (4) 先進校視察
- (5) 児童アンケート作成・実施・分析

専門部 (調査・分析部)

7	研究の組織								
	(1) 組織図	校長・教頭							
		研究推進委員会							
		学力向上チーム							
		全体研究会							
		授業研究部			専門部				
		低学年部	中学年部	高学年部	学習基盤部	調査・分析部	校内環境部		
		○有森千	◎有森隆	◎徳永	小川	原	前田	村岡	
		村岡	前田	大曲	諸石	徳永	○大曲	宮原	
		小野原	諸石	光武	○橋村	有森隆	山口	◎光武	
		永池		井手	◎中島	◎小野原	土井	古川	
		◎小川	○原	○宮原	江口	○針長	有森千	中村	
		土井	山口	中島	毎原	永池		道田	
		江口	古川	橋村				井手	
			針長		(学力向上)	(心育て)	(ときめき)	(体づくり)	

(2) 組織の内容

- ①研究推進委員会・・・校内研究の骨子を作成し、研究の深化と効率化を図る。
全体研究会で出た問題について協議し、解決を図る。
- ②学力向上チーム・・・校内研究との関連を図りながら、授業改善、学びを支える取組の計画・提案を行い、児童の学力向上を目指す。
- ③全体研究会・・・研究推進委員会から出された内容について協議をし、共通理解を図る。
各部会からの提案や取組について協議し、共通理解を図る。
全体研究授業の指導案検討・事後研究会を行う。
- ④授業研究部会・・・学級担任、指導法改善担当、級外が低・中・高学年部に所属し、それぞれの学年の児童の発達段階に応じた実践研究を進めていく。
- ⑤専門部会・・・学習基盤部、調査・分析部、校内環境部で組織し、授業研究以外での効果的な取組について実践していく。それぞれの部会は、学校運営組織のプロジェクトチームと同じメンバーで構成されているため、チーム会議で、専門部の話し合いや活動を行うこともある。

明倫小学校 学校教育目標

いい顔 いい声 いい動き

笑顔で

元気に

考える

仲間とつながり、
さいごまでがんばる「心」

目標に向かって、
さいごまでがんばる「体」

なぜを大切に、
さいごまで考える「学び」

【研究主題】
粘り強く解決し、学びを深める児童の育成
～算数科授業づくりの工夫を通して～

なぜ?と思ったけど、
友達の考えと比べて考
えたら、やっと納得で
きたよ。解決の仕方が
分かったよ。

三角形や四角形の面積
の公式を使うと、平行
四辺形の面積を求め
ることができたよ。

粘り強く解決する力

振り返りの充実

対話を生み出す場

課題設定の工夫

深い学び

「学びに向かう力・
人間性等」

「思考力・判断力
・表現力等」

「知識及び技能」

資質・能力

算数科の授業づくり

学習の基盤・環境づくり